



子どもたちのこと

大橋利恵子

E子のセンセイはM子

E子は幼稚園に入るまで、昼間は祖母と二人で家の中で静かに暮しており、赤ちゃんの時からじっとしている方だった。公園に行くことはあっても危ない遊びや鉄棒

などめったにやることはなく、砂いじりのような遊びが多かった。肺炎になったこともあって、少々かぜを引いてもすぐ厚着になるので、なかなか丈夫になってこない。いわゆる過保護である。もともとの性格に環境が作用して、E子はかなりのこわがりになってきた。まず他

人がこわい、ふつう3才ぐらいの子どもは大人をこわがっても自分と同じぐらいの子どもにはいつのまにか近づいていくものだが、E子はその友だちもこわい。それから、からだを動かすこともあまり好きではなく、すべり台、ジャングルジムなどはこわくてできない。プールも浮き袋をもってなら楽しく入れるが、自分だけで泳ぐ練習となるとこわいのである。

そんなE子だから、園生活に慣れるのは大変であった。入園当初はだいたい長い間泣いていた。どうやら泣かずに登園してくるようにはなったが、初めてのことは何でもこわいからやろうとしない。汚れて遊ぶようなことはきらいだし、自分からはなかなかしゃべれない。例えばトイレだって、一人で行くことがなかなかできない。先生にトイレに行きたいと言えるぐらいなら苦労はしないのだが、結局せっぱつまってその場で……ということも何回もあった。(その時のE子の気持を思うと心痛む思いである。)

それでも徐々に、E子はE子なりの努力をして園生活

に慣れ、みんなの活動をじっと見ていることが多くなった。家に帰るとその遊びをそっくり再現して一人で遊ぶのだそうである。そのE子が、友だちの遊びの中に参加していきけるようになったのは、M子の手助けがあったからである。

M子はやはり内気なおとなしい子である。でもM子はじっとはしていない。いつも自分で遊びを見つけたり、考えたりして行動できる。その遊びに活発な子たちが参加してくればそれなりに一緒に遊ぶし、また自分からも活発な子たちの遊びがおもしろそうなら参加していく。何よりうれしいことは、M子はひとりではぼんとしているような子にちゃんと声をかけ、一緒に遊んだり、グループの中に入れるよう橋渡しの役をしたりしてくれることである。E子の他にも、K子、O子、Y子などがM子に助けられて遊びに参加してきている、かといってM子は自分の意見を押しついたり、いばったりはしない。そしてまた、しっかりしているのにと教師の方が残念に思うほど表面に出て発言したり、リードしていったりとい

う行動はとらない。母親が「内気すぎてだめなんです。」
と言うぐらいである。

E子が朝、提出すべき手紙を持ってきて、それをどう
したらいいかわからないで手に持って立っていると、M
子は「ここにおくの」と手を引いてつれていく。また、
帰りの身じたくをし、すわって待つ時も、立ったままでい
るE子の手を引き「E子ちゃんは私にしか慣れてないか
ら二人一緒にすわらせて」と二人分の空席を確保し共に
すわる。実に適切に援助してあげている。遊びにももち
ろん手を引いていく。かといってM子が犠牲になって遊
んでいないわけではない。また、E子のいやがることを
無理にさせようともしない。素晴らしいことにごく自然に
M子はE子を援助してきてくれた。始めは手を引かれて
いたE子も段々自分からM子の後をついていくようにな
った。そしてさらに、遊びに入ってしまうはM子以外の
子とも遊べるようになった。するとM子は自然にE子の
世話をやかなくなった。現在E子はまだまだ自己主張
はしないけれど、M子が居なくても誰かと遊べるように

なってきた。M子のE子に対する援助の適切さ、やさし
さを思う時、教師のあるべき姿を知らされたようで、己
の未熟を恥じるばかりである。
(岐阜北幼稚園)

